

願はくはわれ春風に身をなして

—— 佐佐木信綱の萬葉学における「評釈」〔『萬葉集選釈』と『新月』〕 ——

Nobutsuna Sasaki's Critical Commentary
on the *Man'yōshū*: *Man'yōshū Senshaku* and *Shingetsu*

小川靖彦

Yasuhiko OGAWA

一 和歌の弘布

萬葉学者・歌学者にして歌人であった佐佐木信綱（一八七二〔明治五〕～一九六三〔昭和三十八〕）は若き日に次のような歌を詠んでいる。

願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門をとばさや

（『思草』¹）

一八九九年（明治三十二）四月、佐佐木の主宰する竹柏会の発足を告げる第一回大会で「春風」の題で詠まれたこの歌は、若々しい気概に満ちている。二八歳にして結社を主宰する佐佐木の気負いも感じられよう。

1 この歌は後に自選歌集『天地人』（改造社、一九三六〔昭和十〕）六五

歳）の巻頭歌とされる。『天地人』所収歌を抄出・解説した「自作自注」の中で佐佐木はこの巻頭歌について「人の心の深くに秘められた憂悶を晴るけることは、歌道の徳の一つであるとやうの当時の信念から、其のころを、意義ある第一回の大会で歌つたのであつた」と述べている。

佐佐木幸綱氏はこの解説を踏まえて「信綱の生涯は、『歌道の徳』を信じ続けた生涯であつた」と捉えている。軽やかな春風に身をなして、歌の力によって憂いある人々の心を慰めたいという願いは佐佐木の短歌創作に止まらず、その萬葉学・歌学の根幹をなすものであつたように思われる。

東京帝国大学文科大学講師を務めながら、創作と研究の両方を精

力的に進めていた時期に刊行された『和歌入門』（博文館、一九二一（明治四十四）〔四〇歳〕）には強烈な和歌弘布の意志が表明されている。佐佐木はその「序」を、「世界いづこの国民でも、詩歌を有しないものは無い。併し日本の国民のやうに、国民一般に行き渡つた文学的の詩歌を有してゐるものは、他に無いであらう」（ルビは省略）という文で書き起こし、和歌が上代以来国民の教養であつたことを強調する。しかし、その当時、旧派と新派が激しく対立する中で、「真に歌の意義を解し、真に歌を愛し、真に歌を楽しんで居る人」が多いと言えない状況に危機感を募らせる。そして和歌が家庭と国民に益々普及することを願ひ、それも国民が和歌について知識を得るだけでなく、ある程度まで実作できるようになつて真に和歌を味わうことを求めるのである。

佐佐木は本論でそのための具体的方法を提示するが、その最初に挙げたことは、明治以前の、『古今集』を始めとする歌集と歌論を讀んで歌心を養うことであつた（第一編 詠歌の精神）。続いて實際の作歌法を説くが（第二編 作歌法）、ここでもその具体例は『萬葉集』や源実朝・香川景樹らの歌など、あくまでも明治以前の和歌である。本論では『和歌入門』執筆までに佐佐木が積み重ねてきた萬葉学・歌学の研究成果が縦横に利用されている。

『和歌入門』において佐佐木は決して守旧派の立場を採つてゐるわけではない。むしろ「明治の生命ある和歌」を詠もうとする人々の側に共感を寄せている。しかし、佐佐木が実作も含めて普及に努

めようとした和歌は、古典の蓄積の上に立つたものであり、また佐佐木の萬葉学・歌学の追究もこの和歌の普及と不可分の關係にあつたのである。

ところで、佐佐木の萬葉学には、(1)『校本萬葉集』を中心とする「文献学的研究」と(2)『萬葉集』の「評釈」という二つの柱が存在している。佐佐木の萬葉学については、現代でも萬葉集研究に必須な『校本萬葉集』が注目される。しかし、和歌の普及をめざした佐佐木にとっては萬葉集歌の情味を味わひ、それを言葉として伝える「評釈」は重要な位置を占めていた。佐佐木は大正年間中頃に、

① 『萬葉集選釈』（明治書院、一九二六（大正五）〔四五歳〕）

② 『評釈ポケット萬葉集』（博文館、一九二〇（大正九）〔四九歳〕）

と相次いで一般向けの「評釈」の書を刊行し、第二次世界大戦後までもない時期に『萬葉集』の初学者や和歌に志す人を読者として想定した（序言）全歌評釈の

③ 『評釈萬葉集』（全七冊、六興出版、一九四八（昭和二十三）〔七六歳〕）

→一九五四（昭和二十九）〔八三歳〕

を成し遂げた（同時期に④『評註萬葉名歌選』（有朋堂、一九四八）、⑤『評釈萬葉百首選』（好学社、同年）も刊行）。

『萬葉集選釈』『評釈ポケット萬葉集』は現在では殆ど顧みられることがない。しかし『萬葉集選釈』は一九二六年（大正十五）に増訂版、一九五三年（昭和二十八）に新訂版が刊行され、管見では一九五七年（昭和三十二）の新訂六版まで刊行が続いたロングセ

ラーであった。五味智英氏は「初学の人の作歌に資する目的で刊行された『萬葉集選釈』もまた、その目的を超えて萬葉集の弘布に力があつたのである」と評している。『萬葉集選釈』は強い影響力を持った書物であった。

今日改めて『萬葉集選釈』を読むと、解釈は穩健であるが、至る所に萬葉集歌に対する感動と共感が率直な言葉で表明されていることが注目される。時として「吾人」は自己の体験を交えながら情熱的に感動と共感を語ることもある。このような書き手の〈私〉の存在の大きさが多くの読者の心を捉えたのであろう。

しかし、この〈私〉のあり方は単に佐佐木の感じやすい心を反映したものでなく、第二歌集『新月』（博文館、一九二二（大正元））前後の時期に、和歌の弘布をめざし創作と研究の連繋を極めて鋭く意識していた佐佐木が意図的に選び取ったものであったように思われる。本稿は『萬葉集選釈』における「批評」の特徴を歴史的に検討した上で、一方では『校本萬葉集』の編集事業を進め、他方では当時の文学史的状况からは例外的な「孤立する歌集」である『新月』によつて新たな世界を拓こうとしたこの時期の佐佐木が、研究と創作を通じて〈私〉という問題にいかに向き合ったかを考察するものである。

二 『萬葉集』の「評釈」

『萬葉集選釈』は四三二首の萬葉集歌を抄出し、配列順に「評釈」する。「評釈」は次のようなスタイルをとっている（旧国歌大観番号は引用者が加えた。以下同）。

世の中をうしとやさしと思へども飛びたちなねづ鳥にしあらねば
らねば
(5・八九三)

かく貧しくて世の中に住むのは、憂しと思ひ恥しいと思ふもの、さりとて鳥でもないから、飛立つて世を去ることも出来ず、詮ないことである、との意。前に挙げた貧窮問答の反歌の第一。「飛び立ちかねづ鳥にしあらねば」とは、いかに痛切な語句ではないか。
(一五八頁)

萬葉集歌を漢字平仮名交じり文で冒頭に掲げ（なお上欄に漢字本文を挙げる）、その意味を、多少言葉を補いながら記し、必要な場合には制作事情や難解な語句についての解説を加え、末尾に鑑賞・批評の言葉を置く。鑑賞・批評の言葉は全ての歌に記されているわけではないが、これを欠く歌は少数である。

現代では萬葉集注釈書やより一般向けの選釈書において鑑賞・批評の言葉を記すことは当たり前のこととなっている。しかし、平安時代の『萬葉集』に関わる歌論書・歌学書と萬葉集注釈書では鑑賞・批評の言葉を記すことは殆どない。それは中世の萬葉集注釈書でも同じである。平安・中世ではその当時意味がわかりにくくなっ

ていた古語・難語の解釈に専ら関心が持たれたのであった。室町時代の宗祇『萬葉抄』には例外的に鑑賞・批評の言葉が見えるものの、抄出された約一一六〇首のうちの六首程度に止まる。⁹⁾

鑑賞・批評の言葉が萬葉集注釈書に本格的に記されるようになるのは近世国学からである。中世以来の伝統歌学を否定し、古語の研究を通じて〈古代〉の心を学ぶことをめざした近世国学においては、鑑賞・批評は〈古代〉に一举に参入するための重要な方法と位置づけられたのである。¹⁰⁾ しかしながら、賀茂真淵『萬葉新採百首解』、上田秋成『金砂』を除き、近世国学の萬葉集注釈書では鑑賞・批評の言葉は必要な箇所とその都度記されるに止まり、各歌に鑑賞・批評の言葉を加えることは形式として確立されなかつた。むしろ近世国学の萬葉集注釈書は時代が進むにつれ、古語の解釈の方を煩瑣なまでに詳細にしてゆくのである。

真淵『萬葉新採百首解』が多くの歌に鑑賞・批評の言葉を記すのは、この注釈書が田安宗武の命で、姫君嫁入りの持参品として編まれたという成立事情¹¹⁾によるのであろう。『金砂』も秋成最晩年に自身身の「遊び敵とせんもの」(『金砂剩言』)として執筆されたことが大きく影響していると思われる。

鑑賞・批評に重きを置いた『萬葉集』の「評釈」の書が本格的に登場するのは一九〇〇年代(明治三十年代)である。そして、「評釈」の書(鑑賞・批評の言葉を記す注釈書・訳書も含む)は、表のように一九一〇年代(大正年間中頃)にかけて続々刊行されたので

ある。概ねこれらの「評釈」の書は、高度に専門化した近世国学の萬葉集研究に対して、『萬葉集』を味わい、初学者にその真価を伝えることをめざすという方向性を共有している。佐佐木の『萬葉集選釈』もこの「評釈」の書刊行の高まり中で産み出されたものにならぬ。

伊藤左千夫「萬葉集通解緒言」(『馬酔木』第8号、一九〇四(明治三十七)―二)での発言、

近く徳川時代にあつて古学を唱へたる一派の学派大いに興り、萬葉集に関する著書の如き又百を以て数ふるに至れり。是等の著書に依て専門的に萬葉集を解すること、最早何等の不足を見ず。只其の余りに専門的になると学者的になると、詩人としての見地を欠けるとは、今日の人をして、一般的にも毫も萬葉集を知るに由なからしめ、詩的解釈の上よりも、毫も萬葉集の真趣味を知ること能はざらしむ。萬葉集は詩人として深く其の趣味を解せざるべからざるは勿論なれども、一般人としても苟も日本人たる以上は必ず普通的に知らざるべからざることには前に云へる如くなれども、今日其の必要に必ずべき好著一も有ることなきは、明治出版界の一大欠陥なり。¹²⁾

と、『萬葉集選釈』の「序」の発言、

仙覚の萬葉集注釈以来、殊に徳川時代に入つてから、萬葉集の註釈類は数多世に出でた。併し、概ねいづれの著も訓詁註釈に専らで、歌集としての萬葉の面目を明らかにするといふ点に

おもきをおくには至らなかつた観がある。これは、寧ろ学問史上当然の、かつ喜ぶべきことといふべきで、吾人は、先輩諸学者が萬葉学に於けるこれら諸々の基礎的努力に対しては、大いに感謝せねばならない。吾人が今日萬葉に就いて言説し得るのも、多くは彼等諸先輩の賜である。併し言ふまでもなく、萬葉集は歌集である。単に萬葉の歌の訓詁註釈だけで甘んずるは、決して萬葉集を愛するもの、満足するところでない。吾人のこの選釈は、歌集としての萬葉集といふ点におもきをおいて、萬葉の歌の歌としての面白みを解し、また味ふといふことを目的とした。(二頁)

とが、近世国学に対する敬意に差があるものの、基本的に重なるところにもそれが窺える。

三 「評釈」の時代

実は明治における『萬葉集』以外の「評釈」の書の刊行は既に一八八〇年代(明治十年代後半)に始まっている。書名に「評釈」を掲げたものに以下がある。

- ・佐田白茅『文詩評釈』(和装三冊、大来社、一八八二(明治十五)〜八三(明治十六))
- ・長梅外『詩書評釈』(和装三冊、梅外書房、一八八三(明治十六))
- ・藤沢恒(南岳)・土屋弘『評釈純正蒙求箋本』(和装三冊、岡島

真七、一八八三(明治十六)

- ・藤沢南岳『評釈韓非子全書』(和装十冊、青木嵩山堂、温古書屋、一八八四(明治十七))

・『古今詩文評釈』(一冊、好文館、一八八七(明治二十))

これらは幕末に尊皇運動を進めた官僚・儒者による漢籍の「評釈」である。しかし、「評釈」の意義が鋭く意識されるようになるのは、一八九〇年代(明治二十年代後半から三十年代前半)の、その次の世代による「評釈」と銘打つ書からのようである。それらの対象は、漢籍はもちろん国文(和文)、国歌(和歌)、俳文、俳句、英詩などにも広がる。例えば、

- ① 森大来(槐南)『唐詩選評釈』(六冊、新進堂、一八九二(明治二十五))

② 落合直文『国文評釈』(五冊、博文館、一八九二(明治二十五))

九三(明治二十六)

- ③ 佐々政一(醒雪)『うづら衣評釈』(近代文学評釈第一編、和装一冊、明治書院、一八九九(明治三十二))

④ 久保天随『漢詩評釈』(評釈叢書第一編、一冊、新声社、一八九九(明治三十二))

は初学者への入門書という形をとりながら、①は『唐詩選』を荻生徂徠・服部南郭らの解釈から解放することをめざし、②は漢文の法を論じた書に匹敵する国文(散文)の法の書を初めて創ることを宣言し、③は国学系統の萬葉学者・源氏学者を偏狭固陋と批判しつつ

表・佐佐木信綱の研究・創作と『萬葉集』の「評釈」の書の刊行

- ・『萬葉集』の「評釈」書については、佐佐木信綱『萬葉集事典』（典籍篇、平凡社、一九五六）、前野貞男氏『万葉書誌学』（忍書房、一九五六）、国立国会図書館の蔵書データベースに拠り、私に情報を補った。「評釈」の書には鑑賞・批評を含む注釈書・訳書も含む。
- ・佐佐木信綱の著作は本論に関わるもののみ掲出した。
- ・「*」は参考であることを示す。

〔佐佐木信綱の研究・創作〕

- 1903 (明治36) 『思草』（博文館）
- 1903 (明治36) 『国歌評釈』（人文社）

1905 (明治38) 東京帝国大学文科大学講師就任

1909 (明治42) 『日本歌選 上古之巻』（博文館）

〔『萬葉集』の「評釈」の書〕

- 1892 (明治25) 畠山健「萬葉集釈義」〔早稲田文学〕第16号
- 1900 (明治33) 正岡子規「萬葉集を読む(一)〜(四)」〔日本附録週報〕
- 1900 (明治33) 長井金風『萬葉評釈』（古今文学会）
- *1901 (明治34) 金子元臣『古今和歌集評釈』（明治書院）
- 1902 (明治35) 神谷保朗『旋頭歌評釈』（明治書院）
- 1903 (明治36) 森田義郎『評釈萬葉私刪上』（大日本歌学会）
- 1904 (明治37) 伊藤左千夫「萬葉集新釈」連載開始
（〜1911）「馬酔木」「アララギ」
- 1904 (明治37) 千勝義重『類題・萬葉集評釈（四季の部）』（大学館）
- 1906 (明治39) 森田義郎『評釈萬葉私刪下』（東京よみかき屋）
- 1906 (明治39) 神谷保朗『統旋頭歌評釈』（明治書院）
- 1907 (明治40) 神戸弥作『萬葉集佳調評釈』（慶応義塾出版局）

- 1909 (明治42) 『国歌集』(民友社出版)
- 1910 (明治43) 『日本歌学史』(博文館)
- 1911 (明治44) 『萬葉集古写本攷』(竹柏会)
- 1911 (明治44) 『和歌入門』(博文館)
- 1912 (大正元) 文部省文芸委員会より萬葉集定本の作成を委嘱される
- 1912 (大正元) 『新月』(博文館)
- 1915 (大正4) 『和歌史の研究』(大日本学術協会)
- 1916 (大正5) 東京帝国大学より改めて萬葉集校本の作成を委嘱される
- 1916 (大正5) 『萬葉集選釈』(明治書院)
- 1917 (大正6) 『賀茂真淵と本居宣長』(広文堂)
- 1920 (大正9) 『評釈ポケット萬葉集』(博文館)
- 1921 (大正10) 『校本萬葉集』の原稿完成
- 1922 (大正11) 『常盤木』(竹柏会)
- 1923 (大正12) 『校本萬葉集』印行、関東大震災により焼失

- 1910 (明治43) 森田義郎 『萬葉長歌評釈』(内外出版協会)
- 1910 (明治43) 森田義郎 『萬葉短歌評釈』(内外出版協会)
- 1913 (大正2) 井上頼文 『萬葉山常百首講義』(会通社)
- 1915 (大正4) 窪田空穂 『萬葉集選』(日月社)
- 1915 (大正4) 窪田空穂 『続萬葉集選』(日月社)
- 1916 (大正5) 豊田八十代 『萬葉集新釈』(広文堂)
- 1917 (大正6) 折口信夫 『口訳萬葉集』(文会堂)
- 1919 (大正8) 竹野長次 『萬葉集私選評釈』(珊瑚礁社)
- 1921 (大正10) 次田潤 『萬葉集新講』(成美堂)

足利期から明治初年の読みやすい文章によって読書力を養うことを主張し、④は『唐詩選』に代わる新たな唐代絶句のアンソロジーを編むのである。いずれも詳細な考証や議論は行わず、言葉の意味や修辞法を必要な範囲で説明し、簡潔な鑑賞・批評の言葉を書き記す。これらの「評釈」の書は新しい読者を想定しながら、文学の新たな枠組みと評価の基準を明快に提示するものとなっている。

そして、一九〇〇年代に入ると「評釈」の書は急速に対象を拡大しながら陸続と刊行されるようになる。「評釈」の書は、明治期の高等教育の伸展によって誕生した新しい読書層に向けて、新たな〈教養〉を提示する役割を担ったものと思われる。『萬葉集』の「評釈」の書刊行の本格的開始を告げる長井金風『萬葉評釈』が、「文学或は散文韻文の研究に志ある」古今文学会会員の實力養成を目的とする雑誌「古今文学」の臨時増刊第9号として刊行されたことは、『萬葉集』の「評釈」の書もこの流れに立つことを示している。

それと同時に、『萬葉集』の「評釈」の書の刊行は、一八九三年（明治二十六年）頃から始まる短歌（国歌）革新運動の高まりとも連動するものであったろう。『萬葉集』の「評釈」の書には明言されていないものの、一九〇一年（明治三十四年）刊行の金子元臣『古今和歌集評釈』が後に改訂された時に付された「昭和新版序」（一九二七年〈昭和二〇年〉）には次のような激しい言葉が記されている。

…私は既に明治の二十六年の交において、国歌の革新を絶叫した一人である。又それに引き続いてこの評釈の挙げた産声は、

一面において幼稚固陋なる当時の歌界に対しての警鐘であり挑戦であつた。

なお佐佐木は一九〇三年（明治三十六年）に人文社から刊行された「評釈」のシリーズ^⑤の一つ『国歌評釈』を執筆している。旧派が退潮する一方で新派が急進化する中、進むべき方向を見出すために「国歌」（和歌）の歴史を顧みるべきであるという主張のもと、それまであまり知られていなかった江戸時代の和歌を、「初学よくよみ味ふべし」（五五頁）、「胸にしみとほるうたなり」（一六七頁）などの共感に満ちた言葉を添えて紹介した。

「評釈」の意義を十分に理解し、『国歌評釈』の経験も踏まえ、また東京帝国大学文科大學講師就任以来の研究成果も携えて佐佐木は『萬葉集』の「評釈」に臨んだことであろう。『萬葉集選釈』の執筆は佐佐木にとって心躍る仕事であつたと思われる。

四 〈共感〉による批評

『萬葉集選釈』の特徴は、萬葉集歌に対する強い感動と共感を率直な言葉で表明しているところにある。例えば、遣唐使の母の詠んだ長歌（9・二七九〇、九一）の鑑賞・批評のことばはその中でも際立って情熱的である。（9・二七九〇）の歌意説明に続く部分から引用すると以下である。

A 当時の幼稚なる航海の時代に於いて、遣唐使に行くわかれ

といへば、殆ど生別の死別である。この危険な旅に一人子をやる母親の心中は、如何であつたらう。而してこの歌は、語句も簡潔に、真精切々として、子を思ふ親心の、そゞろに読者の心に迫つて来るのを覚える。遣唐使といふ上代の文明史上の最も記念すべき現象とともに、まさに永久に伝ふべき作である。而してこの歌の反歌たる、

たび人のやどりせん野に霜ふらばわが子はぐくめ天のたづ
群むら (9・一七九二)

に至つては、遣唐使の一行が宿りせむ野原に、霜などふらむ時は、天なる鶴の群よ、来つてわが子をはぐくんでくれよの意で、老たる母の心に、遠くゆくわが子が唐土の旅を思ひやつた心が現はれてあはれ深く、まさしくこの長歌にも遜色のない傑作である。前の、「君なくば」(引用注、(9・一七七七))と並んで、彼は妻の夫を思ふ情、これは母の子を思ふ情、いさ、か異なるところはあがあるが、ともに称して萬葉集中抒情の歌の双絶となすことが出来る。(二〇四―二〇五頁)

佐佐木は(9・一七九〇)について「語句も簡潔で真精切々」と、(9・一七九二)について「あはれ深」き歌と激賞する。

平安・中世の歌書や萬葉集注釈書では秀歌として挙げられること
のなかつた(9・一七九二)に高い評価を与えたのは賀茂真淵『萬
葉新採百首解』(一七五二年(宝曆二)成立、一八五一(嘉永四)刊)であ
る。⁽⁶⁾この歌を萬葉秀歌の一首として挙げ(五一番歌)、次のよう

な鑑賞・批評の言葉を記した。

B わが子のもろこしへも行てこん道のほど、おぼつかなきに
か、すめ神の御めぐみあはれみ願ふ意よりして、天とぶ霍に
言よするがあはれ也。やどりせん野に霜ふらばてふは、その
一事を挙いふのみ。歌の常也。

佐佐木の鑑賞・批評は、この歌を「あはれ也」と評した真淵に連なるものと言える。

また佐佐木は長歌(9・一七九〇)について語句が「簡潔」であると評した。「簡潔」やこれに類する「簡素」「単純」「単直」「平明」「素朴」は佐佐木が『萬葉集選釈』の中で繰り返し用いた評語である。

・言葉は簡素ながら、意味は極めて深長である。(1・二二五)(二五頁)
・平明のうちに、ふけゆく秋の深いさびしみが切実に歌はれてゐる。(10・二二六〇)(二二七頁)

これらも、例えば(10・二〇五五)を、
ことほり明らかにて、よくと、ひたる哥なり。《二一番歌》

と歌意が明らかで整った歌と評し、歌に多くを詰め込まずに、「直き一つ心」をありのままに詠むことを理想とした真淵の萬葉批評の延長線上に位置するものと見ることが出来る。

さらに(9・一七九〇)の「真精切々」は「真情切々」の誤植であるが(増訂版で訂正)、佐佐木は「真情」「至情」「至純の情」「天真の感情」「真実な感情」「自然な感情」「素朴な偽り飾らない心」な

どを重視した。これらも、〔10・二二二〇〕の妻問いする鹿のた
に早稲田を刈るまいという現実の生活からは遠い発想についての次
のような真淵の説明、

思ひつる心を即いひたるのみ。終の理りを思ひかへすまでに
まだ暇なし。古はかく其俣にいへる故に真なり。後の人はおも
ひかへしていふゆゑに、真てふものあらず、巧みて作れるもの
也。哥はたゞおさなかれといひて、おさなき子の心のまゝにい
ふを、誰かにくしとするや、古き哥は主旨しかり。さてこそ神
もめで給ふべきなれ。中々なる理りだちていふは、限あるわざ
なるをや。《一九番歌》

に典型的に現れている「真」の尊重に通うものである。なお真淵
はここで〈幼き子の心〉を肯定したが、『萬葉集選釈』にも、
・：幼げにむろの木に言ひかけたところが、言ひ知らずあはれで
ある。〔3・四四八〕（二二頁）
のような鑑賞・批評の言葉が見られる。

このように『萬葉集選釈』の鑑賞・批評は真淵『萬葉新採百首
解』の流れを汲んでいる。しかし、〔9・二七九〇、九一〕の鑑賞・
批評の言葉AとBを仔細に比較すると重要な違いも見出せる。真淵
のBは、旅の無事を「すめ神」に願う心を天飛ぶ鶴に事寄せている
ことに「あはれ」を感じている。直接に神に祈るのではなく、自然
に託すという表現のあり方に思いの深さを見ているのである。

『萬葉新採百首解』は巻末の「附て記す」に鮮明に打ち出されて

いるように、歌を「姿」（ことばと調べ）と「心」の調和という観
点から批評する。やすらかな心をゆるやかな言葉で言い連ねた歌を
を理想とする明確な批評の基準が存在している。それゆえ個々の萬
葉集歌の鑑賞・批評においても、表現のあり方に注目し、「姿」と
「心」の関係を味わうのである。

一歩引いた地点から萬葉集歌を鑑賞・批評する真淵に対して、佐
佐木のAは、歌の作られた時代状況も考慮に入れながら、作者の心
に寄り添い、書き手の〈私〉に沸き上がって来た感動を率直に記し
ている。これは、「〈共感〉による批評」と言えよう。

『萬葉集選釈』に広く認められる〈共感〉による批評の理論的な
根拠を、『和歌入門』の「感味」の主張に求めることができる。『和
歌入門』の「第一編 詠歌の精神」の「第四章 観察及び感味」にお
いて歌心を養うための観察と「感味」を説く。外界の観察、そして
自分の心を感じるこの次の段階として以下を考える（引用に際して
ルビは省略した）。

・：人には同情同感といふものがある。他人の感情といふものが
ある。他人の感情に触れる毎に、自分の感情をも動かして、互
に感じあふものである。此同情同感が素と成つて、また歌が出
来る。即ち単に自分の実際に経験した場合のみでなく、能く他
人の様々の感情に同情して、それを歌に詠むといふやうになる。

否、更に歌心が発達して来ると、実際の事実を縁にして、
様々に想像の上で創り出した感情のうちに入つて、我と我が歌

の世界を創り出すに至る。ここに至つて歌心の極致に達するのである。歌よむ人は、此境に至らむことを心がけねばならぬ。

(六五—六六頁)

佐佐木は感情を味わうことを「感味」という独特の用語で表現する。そして「感味」の中でも、自分の實際に経験した時の感情から進んで、他人の感情や想像の上で創り出した感情を味わう時にこそ、真に歌心が養われることを主張するのである。

佐佐木は『萬葉集選釈』の巻頭に置かれた萬葉集概説の冒頭で、

こたび初学の人の為に、専ら作歌に資するところあらしめるとの目的のもとに、字句の穿鑿などに余り陥ることなく、極めて簡明に、萬葉集中の勝れた作を評釈して見ようと思ふ。

と宣言している。『萬葉集選釈』における〈共感〉による批評は、初学の人が歌心を養うために、「感味」を萬葉集歌について実践して見せたものであったと言えよう。¹⁹⁾

五 〈私〉のあり方

『萬葉集選釈』の〈共感〉による批評においては、書き手の〈私〉が大きな存在感を示す。「吾人」という一人称がしばしば登場するのもその表われである。さらに次のように〈私〉の個人的体験さえも記される。

山の辺の御井を見がてり神風の伊勢少女どもあひ見つるか

も

(1: 八二)

…殊に自分は、この御井に近き鈴鹿郡石薬師村に生れ、母の生家の神戸に赴くとて、幼時しばく此御井の傍を過ぎたので、此歌をよむと、甲斐川の流を隔てて、遠くあなたに伊勢の海まで見はるかさる、山かげの御井のあたりの眺望と共に、今は荒れはてたその井のもとに、奈良朝の貴族と伊勢の国に里少女とが、相対した景色までが心にえがかれて、殊に感が深いのである。

(三—三二頁)

佐佐木の個人史がベースとなつて、歌の情景が「想像」されている。〈共感〉による批評の〈私〉は客観的な論述主体ではなく、個人的感情を持った、時としては右のように身体性さえ具えた存在なのである。

このような〈私〉が、真淵『萬葉新採百首解』には取り上げられなかつた歌に新たな解釈をもたらし、これを秀歌として発見している。その典型が大伴旅人の「酒を讀むる歌十三首」(3: 三三八—三五〇)である。

この十三首を読み味はつて来て、吾人の心に感ぜられる所は何んであらうか。古来この十三首の歌の異彩あることを注意する人は多くある。併しこの十三首を以て、作者大伴脚が単に酒客としての諧謔と解したり、或はまた一種の老莊思想の再現としたりするは、正当な見解とは言へない。吾人はこれに反して、この十三首のうちに、一つには我が国民本来の強い現世思想と

ともに、また当時の時勢に対する烈しい痛罵の声をき、得るのである。儒仏の思想の侵潤して来た当時の状態は、思ふに幾多の半可通の儒仏主義者、幾多の偽善者が横行したことであらう。これに対する激しい憤慨の声、これ即ち本書に聞きうるところである。かくの如くにして、固よりこの十三首の根本に流れてゐる思想感情の傾向は、決して浅薄な楽世主義ばかりでないのみか、更に吾人は、真率にして強い性格を有する個人の、或る機会に際し、切に経験した痛罵諷刺の声を聞かざるを得ない。

(一〇六—一〇七頁)

佐佐木は「吾人」を三回も繰り返しながら、「酒を讀むる歌十三首」を時勢に対する烈しい痛罵の声と捉え、高く評価する。『萬葉集選釈』にやや先行する森田義郎『評釈萬葉私刪上』(大日本歌学会、一九〇三(明治三十六)も、「我等祖先が人生觀」である現世主義、楽天主義を見、偽善的な儒者・仏教者への批判を読み取っている。²⁰⁾しかし、佐佐木は森田よりもさらに痛切なものとして、旅人の憤りを受け止めている。

この佐佐木の解釈は、第一歌集『思草』以来数多く詠まれた、さかしげに昨日は人をなぐさめつ今日の憂をわれいかにせむさかしげにいづこの誰か道を説く酔ひて歌ひて我世は過ぎむ

(『思草』²¹⁾)

のような述懐歌の根底を流れる憂いと憤り(それは『国歌評釈』における世に受け容れられなかつた歌人たちの述懐歌への強い共感に

も底流している)が、旅人の「酒を讀むる歌十三首」と烈しく共鳴して生み出されたものであらう。²²⁾

しかし、この(共感)による批評の(私)は決して頑なで硬直した自己ではない。述懐歌のような「自己表現」とは正反對のフィクションの歌をも高く評価するのである。大伴旅人が創作した「松浦河に遊ぶ序と歌」の中の「女子等」の歌(五・八五四)については、「うつくしくなだらかな調子のうちに、言ひ知らぬ優しさがこもつて」(一五三頁)いると記し、七夕歌には「美しい天上の恋に涙をそ、いだ」「素朴の心」(二二四頁)を見る。

女性の恋歌・旅の別れの歌・挽歌に込められた「情」を丁寧に読み解いているのも、(私)の柔らかさによるものであらう。

今更に何をかおもはむ打なびき心は君によりにしものを
(4・五〇五)

歌の意は、心は已に一すぢに君によつたものである。今更に何をか思ふやといふので、些か不安の念をも含んだ恋の安心を歌つたもので、「今更に」の句に、もし思ひすてた意を含めて解しようと思はば、それは恐らくは後代の心を以て古人の情を讀んだものであらう。

「今更に」に自分を言い聞かせようとしているかすかな不安を感じ取るのである。同じ歌について、斎藤茂吉『万葉秀歌上』²³⁾が、

…女性の声の直接伝わり来るような特色ある歌として選んだが、そうして見ると、素直でなかなか佳いところがある。前に既に

「君に寄りななこちたかりとも」(卷二・二一四)の歌を引いたが、この歌はもつと分かり易くなつて来て居る。

と、歌の外側からその「女性らしさ」を大掴みに捉えているのとは対照的である。佐佐木の批評と比較すると、茂吉の批評の背後には〈男性〉の視点が強固に存在しているように思われる。

以下も佐佐木のやわらかな〈私〉が歌に寄り添うことで見出した微妙な心の動きである。

・如何にもまめやかなる少女の情のあらはれた作である。「家思ふと」云々の句には、幾分の皮肉と怨恨とが含まれてゐる。作者が可憐にして伶俐な人からも忍ばれてなつかしくおもはれる(3・三八一)(二二二頁)

・綿々尽きがたい恨みの情に、幾分の嬌態もこもつた、美しく艶な作である。(10・一九九〇)(二二三頁)

『萬葉集選釈』における〈共感〉による批評の〈私〉は、佐佐木の個人的な感情に深く根ざすものであった。しかし、それは他者から峻別され、それ自体で厳しい統一性を持った「自我」ではなく、時代の違い、事実か虚構かの別、性別を超えて自在に寄り添い共感することのできる〈私〉であつたのである。

このような佐佐木の〈私〉と比べるならば、当初の佐佐木の主宰する「心の花」で執筆活動を展開、やがて袂を分かつた根岸派の伊藤左千夫、森田義郎の『萬葉集』の「評釈」の書は、強力な批評基準のもと、『萬葉集』の表現の良し悪しを論じ定めており、その主

体は「自我」としての性質が強く、より「近代的」と言えるであろう。それだけに佐佐木の〈共感〉による批評は、「近代的な」萬葉批評と短歌制作が切り捨てて行つた豊かな可能性を示しているように思われる。

六 『新月』における〈私〉の問題

佐佐木の第二歌集『新月』に収められた作品には、用語や場面設定などにおいて、『古事記』『萬葉集』『竹取物語』『源氏物語』『和泉式部集』『山家集』などの古典の強い影響が認められる。この時期までの佐佐木の古典研究の成果が創作に積極的に持ち込まれてゐる。

そして、古典研究の導入は用語や場面設定などに止まらず、歌の作り方そのものにも及んでいる。『新月』には古典に寄り添う形で作られたと考えられる歌が散見するのである。

『萬葉集』と関わる典型的な歌を三首取り上げたい。

(1) 「うつせみの世や二^{ふた}ゆく」^{む思}、否^{いな}あらし、又^{また}の世^よにして語^{かた}らは

この歌は明らかに次の萬葉集歌を踏まえるものである(『評釈萬葉集』の訓読文で引用)。

うつせみの世やも二^{ふた}行く何^なすとか妹^{いも}に逢^あはずて吾^{わが}が独^{ひと}宿^ねむ

(4・七三三)

これは大伴家持が大伴坂上大嬢の歌に和した歌である。『萬葉集選釈』にこの歌は挙げられておらず、後年のものとなるが『評釈萬葉集』において、佐佐木は「この人間の世が二度と廻つて来るものであらうか、それであるのに、どうしていとしい御身に逢はないで、自分が独り寝られようか」と訳し、次のように評す、

〔評〕初二句は観念的であるが、また、次に述べるやうな類句はあるが、すぐれてゐる。しかし、三句以下に、情熱の高潮が見られる。現世を深く観ずるにつけて、恋の遂げ難く、青春の過ぎ易いのが歎かれたのであらう。「うつせみの世やも二行く」は「世のなかはまこと二代は行かざらし過ぎにし妹に逢はなく念へば」(一四一〇) から得來つた句と思はれる。

(1)の「うつせみの世やも二ゆく」は、「4・七三三」の初二句を直接話法で引用した。この人間の世は二度廻つて来ることはない、人生は一回しかないという道理を誰かに示された場面、または恋の相手がそのように嘆いた場面を想定しているのであらう。この歌の〈私〉はその道理を強く否定し、人間の世が繰り返すことを信じ、その時また恋人と互いに仲睦まじくしようと深い思いを表明する。情熱的な〈私〉は上代人以上に上代人的である。この〈私〉は佐佐木自身ともとれなくもないが、むしろ情熱的な古代世界を生きる人物と見ることができるよう思われる。

(2) 少女子も手力もたり死の国の関に石す君をば遣らじ

〔新月〕九七頁

この歌は次の萬葉集歌を踏まえている(『萬葉集選釈』の訓読文で引用。以下同)。

石戸いはとわる手力たもがもたよわき女にしあればすべの知らなく

(3・四一九)

これは手持女王の挽歌である。この歌は『萬葉集選釈』に引かれ、その「評釈」は(2)の歌を解釈するための手懸りとなる。

…石戸いはとわる云々の故事は、古事記の天照大神岩戸がくれの条を思ひよせたのである。但しこの歌についても注意すべきは、上代人の死といふ観念である。岩戸いはとわる手力たもがも云々の思想は、勿論作者に於いても一種の詩的誇張であつたのであらうが、併し上代人の死生に対する考は、今日の人々のその如く明瞭なものでなかつた。彼等は死とは暗いよみの国に旅立つことぐらゐに考へて居たので、決して生死を以て相容るべからざる反対の事実とは考へてはをらなかつた。随つてこの歌の思想も、吾人の思想を以て考ふる所よりは、一層実感味のかつたものである。而してかく考へて来て、この歌の感じは、一層痛切、即ち真実に之を了解し得べきである。

(一一八頁)

佐佐木は、上代人は生と死を連続的に考へており、墓所の石戸を割りさえすれば亡くなった河内王に逢うことができると思ひながらも、力弱い女性であるためにそれができないことを嘆いた歌と解している。

(2)は明らかに「少女子」の歌である。あるだけの力を振り絞つて

石を据えて「君」を死の国に行かせまいとする「少女子」は、生と死を連続的なものと考えている。「少女子」は上代人として設定されていると見てよいであろう。そして石戸の向こうの死の国に行ってしまった河内王に逢えぬことを悲しむ手持女王に対して、「少女子」はそもそも「君」を死の国に行かせまいとするのである。(2)は〔3・四一九〕を踏まえながら、〔3・四一九〕以上に生と死を超えた激しい情愛を描いている。

(3)にくげ言いはれにぞ来し逢へばまづにくげ言いふ人と知りつつ

〔新月〕 一一二頁

逢えばまず悪口を言われることはわかっているのに逢いに来たと思ひれずに言うこの歌は、直接に萬葉集歌の歌句を引用しているわけではない。しかし、「にくげ言」の繰り返しと、それでも逢い来たのだという諧謔味を含んだ自虐的な言いは、大伴坂上郎女の次の歌を想起させずにはおかない。

来むといふもこぬ時あるをこじといふをこむとは待たじこじといふものを
(4・五二七)

この歌は『萬葉集選釈』にも取り上げられ、
：畳みかさねて恋の恨みを述べたのである。畳句の句法が怨言の意に協つて、いかにも活きて用ゐられている。結句のくりかへしいうたのにも力がある。
(一三三～一三四頁)

と評されている。(3)は〔4・五二七〕に答える男性の立場に身を置いて作られた歌のように思われる。

このように佐佐木は『萬葉集』に寄り添いながら、時代や性別を自在に超えて新たな歌の世界を創り出しているのである。それは「評釈」の成果を利用するものであるとともに、〈共感〉による批評という「評釈」の方法と通底するものと見ることができるよう。

『新月』における〈私〉の問題については佐佐木幸綱氏の論がある。佐佐木氏によれば、

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

〔新月〕 七頁

などの作では「作中から〈私〉が意識的に消され、そのことで深い静寂が獲得されている」のである。『新月』において佐佐木信綱は意識的に〈私〉を消す一方で、〈私〉を様々な時代の様々な人物に変化させたのである。『新月』は〈私〉に関する実験を試みた歌集と言える。

また久保田淳氏は『新月』で「君」と呼ばれる女性は実在の一人の女性ではなく、虚とも実とも見える蠱惑的な「君」との恋の世界を創出しようとしたと捉えた。私はその恋の世界を創出するために大きな役割を果たしたのが古典であり、その「評釈」の方法であったと考える。古典に寄り添いながら、様々な〈私〉を演じる『新月』は、近代的な「自己表現」とは別の文学の可能性を示した。古泉千樫や斎藤茂吉らは『新月』に否定的評価を下したが、『新月』が「自己表現」の完成に邁進していた同時代の歌人たちには受け容れがたいものであったことは想像に難くない。

*佐佐木信綱『萬葉集選釈』の本文は初版（一九一六年〈大正五〉十二月十二日発行）に拠った。

〔注〕

- (1) 本文と表記は原本の初版（博文館、一九〇三）に拠った（以下同）。後の『天地人』では第四句の「憂」に「うれへ」と振り仮名する。
- (2) 佐佐木信綱「自作自注」『短歌研究』第七卷第七号、一九三八―七。
- (3) 佐佐木幸綱氏「佐佐木信綱」、二二六頁、桜楓社、一九八二。
- (4) 『和歌入門』の「序」に「此昔ながらの形式に新しい感情を盛つて、明治の生命ある和歌を詠まうとする人たちの努力も、一方に認められて居るが、それと共に、一方には今なほ旧態を守つて、固陋の考に囚はれて居るものがある。それらの勢力は中々大きい」とある。
- (5) 五味智英氏「佐佐木信綱博士の萬葉学」『心の花』第68巻第4号、一九六四―四。五味氏は「弘布」ということについて、「単に軽い意味の一般向けのものでなく、学者を益することが大きかつた」と言い添えている。
- (6) ともに博文館から刊行された『和歌入門』と『新月』はいずれも四六判で、表紙に同じ狛犬模様を空押しし、姉妹編のような印象を与える装丁となっていることも注目される。
- (7) 『校本萬葉集』の編集事業に関しても和歌弘布の意識が深く関わっている。佐佐木「萬葉集雑談」『心の花』第14巻第1号、一九一〇―一〇。によれば、佐佐木はまず一般の人々のために平仮名漢字交じりの「改訂萬葉集」を作成し、その次に専門家のための「校本」と「定本」の作成へと進んだのである。現代ならば逆のプロセスを辿るところである。
- (8) 佐佐木幸綱氏「孤立する歌集」佐佐木信綱2「佐佐木幸綱の世界」6（底より歌え・評論篇1）、河出書房新社、一九九八。
- (9) 「1:六四」「2:九二」「2:一〇七」「14:三五七〇」「20:四四〇〇」

[20:四四三四]。

- (10) 小川靖彦「萬葉学史の研究」終章・萬葉学史の研究の課題、おうふう、二〇〇八（二刷）。
- (11) 原雅子氏「萬葉新採百首解」私見―真淵の和歌観をさぐる―『賀茂真淵考』和泉書院、二〇一一。
- (12) 斎藤茂吉・土屋文明編『左千夫歌論集』巻一（岩波書店、一九二九）に拠る。
- (13) 主に国立国会図書館の蔵書データベース、国立情報研究所のNACSIS Webcat、およびJini Booksを利用して、「評釈」の書の情報収集した。未見のものもあり、調査・研究の結果は改めて報告したい。なお東京専門学校（早稲田大学）の「講義録」として「評釈」の書が多数刊行されている。正確な発行年の明らかでないこれらの検討も近代における「評釈」を考える上で重要である。
- (14) 長井金風『萬葉評釈』の末尾に付けられた広告文。なお『萬葉評釈』には上田萬年が序文を寄せている。
- (15) このシリーズは新声社の「評釈叢書」を引き継いだものであろう（久保天随『漢詩評釈』（一八九九）、佐藤儀助『漢文評釈』（一八九九）、坂本四方太『俳文評釈』（一九〇〇）が刊行されている）。人文社のシリーズでは佐佐木「国歌評釈」の他、久保天随『漢詩評釈』、浅野愚虚『英文評釈』、戸塚始射『英詩評釈』、大町桂月『国文評釈』、河東碧梧桐『俳句評釈』、飯田龍泉『漢文評釈』。
- (16) 『萬葉新採百首解』の本文は『賀茂真淵全集』第十九巻（統群書類従完成会、一九八〇）に拠った。適宜濁点を加え、読点を句点とした。児山信一氏校訂解説『新採百首解 山常百首』（萬葉学叢書第三編、紅玉堂書店、一九二七）も参照した。
- (17) この真淵の（幼き子の心）の肯定は、契沖の「はかなきやうなる」もの肯定、それを受けた荷田春満の「をろか」の肯定に遡ることができる（小川注〔10〕書、終章参照）。
- (18) 『萬葉新採百首解』は〔3:三〇三〕についても「さて名残おもふ情をばいはで、其有さまのみいふに、其時のおもひのほどもしられて哀也」

《四七番歌》と、心を言い尽くさない抑制された表現が感じさせる思いの深さを「あはれ」と評している。

(19) 新訂版では冒頭の文章は「萬葉集中のすぐれた作を、極めて簡明に評釈して、萬葉集を鑑賞する人の便にしようと思ふ」と改められている。なお『萬葉集選釈』には、『萬葉新採百首解』には見えない「壮大」「壮重」「雄大」「崇大」「堂々」などの評語も頻りに用いられている。これらについては別の機会に論じたい。

(20) 森田は「……こんな腐儒や坊主が教を説い処が面の皮一枚の教で、耳口四寸の道にしか出でない、皮一枚剥けば真赤な虚言だ、心の内が見えたら自分で自分を欺いているのだ。こんなことに迷うことなしに楽しむだけ楽しみ、飲むだけ飲み働だけ働いたら、遂には死ぬるのだ、と説いたもので今の偽善になれたる人たちにはわからぬことであらう」と記す。

(21) 『佐佐木信綱集』（竹柏会、一九五〇）、『佐佐木信綱全歌集』（ながらみ書房、二〇〇四）では、一首目の第四句の表記を「今日の愁を」とし、二首目の第三句の本文を「言挙げする」とする。第四・第五句の表記を『佐佐木信綱歌集』では「酔ひて歌ひて吾が世は過ぎむ」、『佐佐木信綱全歌集』では「酔ひて歌ひて我世は過ぎむ」とする。

(22) 野山嘉正氏によれば、佐佐木は和歌を政治的な慷慨を託すものとした幕末維新期の和歌観の流れに立って、政治社会と積極的に連動することが歌学の使命と考えていた（『日本近代文学の詩と散文 明治の視角から』第五章・伝統詩歌の変容―継受と革新―、明治書院、二〇一〇）。

(23) 斎藤茂吉『万葉秀歌 上巻』（岩波新書、岩波書店、一九三八（初版）は六一刷（一九八三）に拠った）。

(24) 本文と表記は原本の初版（博文館、一九二二）に拠った（以下同）。『佐佐木信綱歌集』『佐佐木信綱全歌集』（注〔21〕書）では、第五句の本文を「語らむ思」とする。

(25) 佐佐木は『萬葉集』の「世やも、二行く」（「やも」の漢字本文は「世毛」）を「世やは二ゆく」に変えている。「やも」と「やは」の意味は同じであるが、佐佐木は上に来る語を主題として提示する「は」の方がこの場合相応しいと考えたか。

(26) 佐佐木氏注（8）書（孤立する歌集）

(27) 久保田淳氏「佐佐木信綱『新月』における『君』『国文学』第43巻第13号臨時号、一九九八―一〇一〇。

(28) 夙に新聞進一氏が佐佐木の歌風について、「作者が普遍性を重んじて、何人にも分かり易い、また同感出来る歌を詠もうとしたこと、また自分一個の主観に拘泥せず、万人の気持になつて歌を作ったこと」と指摘したことが顧みられる（『明治大正短歌史』東京堂、一九五八）。

〔謝辞〕本論文は佐佐木信綱研究会の二〇一一年九月二十四日（土）でのレクチャー「願はくはわれ春風に身をなして―佐佐木信綱博士の萬葉学のめざしたものの（校本）と『評釈』と」のうち、「評釈」に関わる部分を加筆してまとめたものです。佐佐木博士の萬葉学について研究を深める機会を下さり、貴重なご意見を賜った佐佐木幸綱先生を始めとする佐佐木信綱研究会の皆様は厚く御礼申し上げます。